－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－LINE2025.11.07

武田さん、26年年賀切手の新聞記事と俵馬の写真、ありがとう。

先ほど、尾西歴民に行ってきました。「起土人形・土鈴」展などの資料も得ることができたので少しお知らせします。

（下）中日新聞（武田さん提供）2025.11.07p15

午年へ 起土人形に 思い乗せ

一宮の伝統工芸品が 26年年賀切手図案に

一宮市冨田周辺に伝わる伝統工芸品「起土人形」を描いた絵が、2026年用年賀郵便の85円切手に採用された。モデルになったものとほぼ同じデザインの俵馬の土人形が、同市尾西歴史民俗資料館で展示されている。切手は全国の郵便局で販売している。（児島恵美）

㊤起土人形がデザインされた年賀切手＝日本郵便提供
㊦年賀切手に採用された絵のモチーフとなった起土人形と、ほぼ同じデザインの「俵馬」＝一宮市尾西歴史民俗資料館提供

切手に採用されたのは、全国の郷土玩具を好んで描き、明治から昭和初期にかけて活躍した画家、川崎巨泉（1877～1942）の描いた絵「尾張一の宮真清田神社古型俵馬」。26年のえとの「馬」にちなんだ絵として選ばれた。

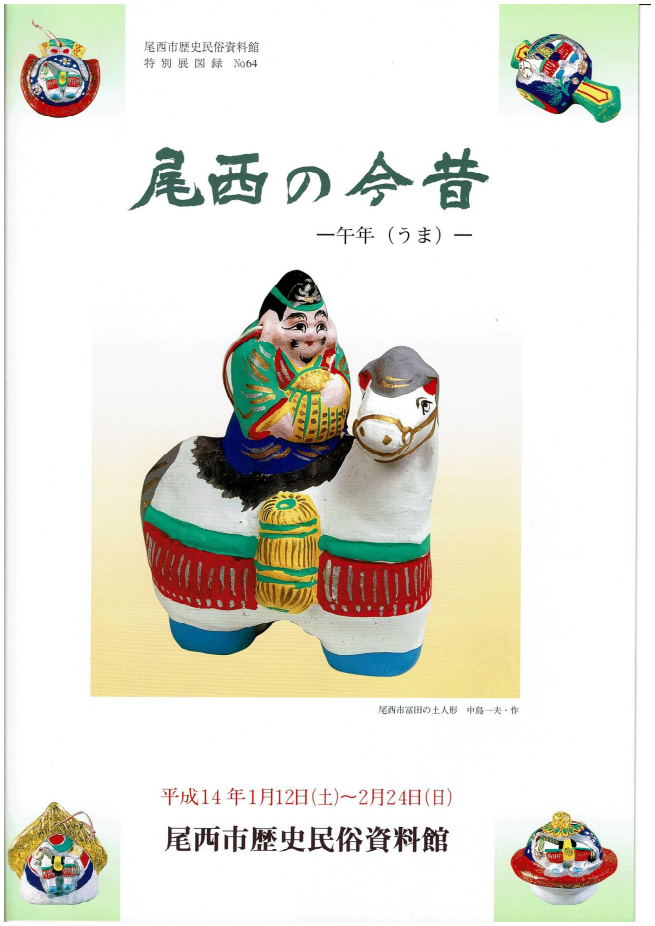
俵馬は豊作を願う縁起物。描かれた起土人形の馬は三つの俵を背負い、緑や赤色の鮮やかな衣装をつけている。

起土人形は江戸時代末期に冨田村（現・一宮市冨田）で初代の中島佐右衛門が作り始め、代々中島家の人が手がけてきた。絵のモデルになった土人形は、真清田神社でお土産として販売されていたこともある。

5代目故・中島一夫さんの妻で、西尾地地方で唯一の土鈴の作り手となった中島一子さん(88)は、市の無形文化財保持者にも登録されている。中島家で作った起土人形が切手に採用されたことを受け、中島さんは「びっくりした。先代から続けてきたかいがあった。今年は切手を貼って年賀状をたくさん出したい」と喜んだ。

（右）尾西歴民企画展「収蔵品展」（2025.10.11/11.9）

（下）尾西の今昔－午年－2002年（午年）の企画展（2002.1.12/2.24）



「起土人形・土鈴」展（2005.6.18/7.31）